



マーカス島(南鳥島)のリーフ

一昨年暮から所用があつて数回この島を訪れる機会を得た。せまい本國に閉じこもっている今のわれわれにとっては、なかなか珍しい環境をもつたこの島の自然は多くの興味ある話題を提供してくれる。日本が東亜の広い地域に發展していた時代には、地圖の上では蚊の涙ほどもないこの島はほとんど無視されていたが、最近の氣象通報で「マーカス島」という名が頻繁に放送されるようになってから、好奇の耳を立てる人も少なくないであろう。このマーカス島こそ「南鳥島」、そのものに外ならないのである。

北緯24度18分といへば、熱帯圏から少しはずれているが、亜熱帯の南緯に近い石垣島、南硫黄島とはほぼ同緯度に位して遙かに東にへだたり、東經153度58分で、日本内地より約1時間早く夜が明ける。

文字どおり絶海の孤島という感が深いこの島は、日米をつなぐ南太平洋航空路の羽田とウェークとをむすぶ線の中間をわずかに南にはずれてはいるが、この間、青海原の上を飛ぶ航空機からは、微かな存在ながら、大きな信賴が寄せられている。

東京の南東約1000海里にあり、10ノット半の船でまる4晝夜かゝる。あけくれ青海原をみつめつゝ、時には胃の腑をしぼるような荒天にもまれながらの往復は海に慣れないものにとっては、あらゆる慾望を喪失する程の苦行である。しかし飛行機によれば5~7時間でゆけ、上空の偏西風のために往航は復航より1~2

時間は短縮される。

景 観

東京灣内にあるお台場そっくりのこの島は周囲5.5キロ、正三角形に近く、面積50万坪ほどの可愛らしいもので、サンゴ礁の基盤に立っており、海拔5~7メートルであるから水面に浮んでいるような感じである。大波が来たなら水に吞まれてしまうであろうなどという話もあるが、それほどではないにしても、かつて大時化の際に怒濤が島の一角を乗り越えたことはあるらしい。

この島を船から望むと、およそわれわれの見なれた島という形からはかけはなれた姿をしている。屋氣樓を見るに似て、輪廓がかすんで見える。紺碧の海原に浮んでいる真白い海岸線、その上に僅かに緑色の一線を画いた幻のような姿、これは、肉眼が強烈な光線のために多少異常を起すためであろう。以前にはこの島を見つけるために十數時間も漂泊したという話もあり、飛行機がいつのまにか島を通過してあわてたなどということもなつづける。しかし現在では施設や計器の完備によつて的確に島を捕えることができる。

空から見下したこの島の景観はまた格別である。純白の海岸線に限どられた鮮緑色のデルタ形をとりまく礁湖には浅黄色の麗水をたゞえ、その中に大小無数のトビ色の岩礁が散在する。これらを一括して黒褐色の環礁が大洋との境界を形作っている。この環礁にくだける白波の変化

のみが僅かに「動」を感じさせるほかは、紺青の大海中に忘れられた海神ネプチューンの玩具のように、静寂の底に眠っている。

サンゴ礁のくだけた粗礫や貝殻の破片から成る路面は硬くて歩行の感觸はよくなく履物の損耗もひどい。砂濱は真白で、キラキラ反射する。

海岸を一周するには1時間半から2時間かゝる。島内は、ほとんど平坦で、特に注意するほどの害虫や獸類もないから、どこでも行ける。

すべて砂礫の堆積で、粘土や壤土がないから、雨が降ってもザルへ水を注いだような結果になる。溜り水も日射が強く風が多いからたちまち飛んでしまう。こんな所でも好んで育つ生物はあるもので、草木が生い繁っている。これらの腐蝕土が相當できるはずだが、風化して地下に沈んでゆくらしく、地面にはあまり溜っていない。はるばる運んできて客土してもじきに沈潜してしまう。

路面にいつのまにか大穴があくことがある。深さ2~3メートル、徑3~5メートルに及ぶものがある。年に1~2箇所は出来るらしい。おそらく基盤のサンゴ礁の一部が溶解して空洞を生ずるためであろう。

植 物

こんもりとした高さ5~6メートルの灌木が島をおおっている。特にモンパノキは青みかゝった緑色の肉質葉に細毛が密生して、光線の加減で白く光った陰影をもち、見るからに南國の植物らしい。同じような木振りで桑に似ているのはトゲミッドノキ(?)でもあろうか。この2種が島の代表的な樹木で、共に旺盛な成長力をもち、絶えず新芽をふいている。これらの間にはババイヤが叢生し、青緑色や黄金色の乳房をたらしめて限りない幻想をさそふ。昔はヤシの林があつて熱帯情緒を満喫させてくれたというが、今はその面影はなく、わずかな地面から葉莖を抜き出している小ヤシが數本生えているにすぎない。

地上を這い延びてたくましいのはグンバイヒルガオである。えんえん數百メートルにも及ぶ莖葉は木質化して太く、挿指ぐらいのは普通であ

る。淡紫色の可憐な花は年中絶えることはないが、5月と10月と、年に2回盛花期があるらしい。

せまい島だけに、草木の種類にも限りがあるが、タバコが所々に自生しているし、特にカラシナ、ツルナ、トマトなどが野生化しているのはありがたい。昨夏、試みにバナナと甘藷を少し移植してみた。成果はまだ分らぬが、いずれも活着している。

野菜の栽培も心がけてはいるが、虫に喰われるのと、雨が少く、土壌がとほしいため、今のところ、成果をあげるまでには至っていない。

以上のほか、島の植物を記すと、

1. トゲミウドノキ(?)
2. トウロウソウ
3. ホナガソウ
4. ニチニチクワ
5. キンゴジュクク
6. ノゲシ
7. アレチノキク
8. シマニシキソウ
9. スベリビユ
10. ハイシバ
11. ギョウギシバ
12. オヒシバ
13. キンエノコロ
14. クリノイガ
15. タツノツメガヤ
16. ヒラテンツキ
17. カゼクサ
18. ヒメシバ(?)
19. アワゴケに似たもの(?)
20. イラクサに似たもの(?)

小動物

こゝにもネズミが多数いる。種類はエジプトネズミ1種のようにであるが、かなり繁殖し被害が多い。

ヘビはいないが、トカゲやヤモリ



マーカス島のパイア

はたくさんいる。毎毎に寝台の上で聞くかん高いよく透る啼き聲を何という鳥だろうかと思っていたが、これは窓ちかく壁にはりついているヤモリの聲と知って珍らしく思った。オガサワラヤモリ又はミナミトリシマヤモリというのだそりで、体長は11センチぐらいを最大とする。

ヤモリと糞り合つて屋内の虫捕りをしてくれるものにアシダカグモがいる。その長脚を立て、机の端などにグロテスクな姿を現わすと、思わぬギョッとさせられることがある。体長は2~3センチぐらいで、褐色の疎毛が生えている。

以上のほか、小動物としては

1. ツチムカデ
2. シマミズ(?)
3. ハエトリグモ
4. 小さいクモ2~3種
5. ノラネコ

昆虫

昆虫類はかなりたくさんおり、調査された北大の坂上昭一氏の話によると70種にも及ぶという。

降るような星空の下、コオロギの聲が微風にのってきて郷愁をそよる。ハマズズ的一种であろうか、これがこの島で鳴く唯一の虫である。

ヅグロカミキリモドキというそりであるが、ランプ虫と俗稱して嫌悪されている虫がいる。窓から灯を目がけて盛んに飛びこんできて、天井に群集することがある。体長1センチほどの細長い虫で、この虫にふれた皮膚面にはたちまち水泡ができて痛み、皮がむけたりしたあとが炎症を起し治りにくい。この現象は、時期により、又、体質によるともいわれているが、まだ詳しい観察はない。

島には水溜りがほとんどなく、あつても鹽分を含んでいるせい蚊のいないことは有難い。多少の毒虫がいても、蚊のうるささにくらべると問題にならない。

不思議に思われるのはトンボがいることである。6~11月ごろ赤トンボを見かけた。どんな棲息過程をとるのか興味ふかい。

昆虫類は以上のほか

1. クルマバツタ
2. ベニゴマダラヒトリ(?)
3. 一種の小アリ

4. 一種の羽アリ
5. ワモンゴキブリ(アブラ虫)
6. ミズキハゴミムシ
7. ナガカメムシ
8. チャタテムシ
9. カツオブシムシ
10. シミ
11. フラジムシ
12. コガタウミアメンボウ
13. ハツミムシ
14. ニクバエ
15. キンバエ
16. イエバエ
17. チョウバエ
18. ススメガ(エビガラスズメ)
19. ブトの如き虫(体長1耗淡褐色)
20. オサムシ(3耗半褐色)
21. ツチカメムシ(2耗黒褐色)

魚類

南側は狭まって不規則であるが、西から北をへて東側にかけては100~200メートルの距離をおいて、水面すれすれに環礁が取りまき、その内側の礁湖は水深2~3メートルで水色が美しく、この中には苔や海藻はほとんどない。体長30~40センチの魚が群遊し、それらの稚魚が群集している。水中メガネを使うと、岩蔭にたわむれている魚の奇妙な姿態と色彩に驚嘆させられる。

日中はあまり見かけないが、月明の夜、環礁の一角に立って水面を見ていると、ときどき環礁の切れ間から流線形の黒い影がスーッと入ってきて、岸近く反轉して、再び外洋へ姿を消す。サメである。ヒラガシラと稱するものらしく、脊から側面へかけて銀鼠色をほかし、白い腹をしている。50~100センチ位のが普通だが、2メートル近いのも稀ではない。ワイヤーをハリスにして餌を投げこむと間違いなく釣り上げることが出来る。工事用のハッパに懸たれてたくさん的小魚が浮くようなことがあると、精悍そのもののような2メートルを越える逸物が、日中でも岸近く侵入して、貪婪な目を光らせながら、狂ったように獲物を奪い吞む。こんなときは誰もゾツとして陸岸へ待避する。

盛夏の頃、穏かな日は遠く環礁に涉つて、ウネリに足をとられるのを警戒しつつ外洋に釣糸を投げると、かなりのスリルを味わえるが、いつ

でも楽しめるのは波止場の夜釣である。サメに釣を取られるのをきらつて底に餌をおろしておくと、ウミヘビがついて釣をはずすのに苦勞する。モンガラドオンが多いが、時にウツボがあがる。共に氣味のわるい相手であるが、ウツボは蒲焼きにして、タレを吟味するとなかなかまい。のっそりとエビやカニが揚げてくることもある。少し餌を浮かせておくとカノコウオがつく。これは目のさめるような真紅色の魚で目玉が大きく、たべて美味である。なお、ダルマオコゼを釣り上げて手を焼いたというものがあり、岩の下にひそんでいるゴンズイを發見して肝を冷やしたというものもある。共に毒線があり、うっかり觸れると致命的被害を受けるという。

外洋は廣いから、魚の種類も多数に上るが、バケ釣であげられたものではメバチ、キハダマグロ、ピンナガマグロ、ソウダ、サワラ、シイラなどがある。船の甲板にあげられたシイラがおでこの額をたたくかれてピチピチはねまわる様はすさまじい。

以上のほか次のような魚がいる。

1. ボラ (Mugil種)
2. オジロ (Safale Taeniura)
3. シラトゲ
4. メジナ科
5. イズミ科
6. ササギ科
7. ガンモン
8. ヒメジ
9. タスキモンガラ
10. ツノダシ
11. チョウチョウウオ
12. アオブダイ
13. スズメダイ
14. クロハギ
15. シマハギ
16. メガネハギ
17. ウマズラ
18. カワハギ
19. クラカケモンガラ
20. ゴトウハギ
21. タスキモンガラ
22. シマアジ (?) (Caranx)
23. コバンアジ
24. ウミキンギョ (天竺鯛科?)
25. キヌベラ
26. ハリセンボン

カニ、エビ —

大小様々のカニがおり、また大き

なヤドカリがいる。特にエビは美事である。体長20~50センチもある大きなもので、イセエビ科の一種で、Panulirus Penicillatus, OLIVIER というものらしい。岩礁の洞穴にたくさん棲んでるようで、潜水に自信のある人なら直接とれるが、静かな暗夜には竿釣にかゝってくる。一夜に10びきも揚がることもある。すこぶる美味である。この甲殻類には

1. スベリイワガニ (?)
2. ミナミイワガニ
3. ウモレアウギカニ
4. ショウジンガニ
5. イボショウジンガニ
6. ユウモンマンジュウガニ
7. Charybdis Erythroductyla (Lamarch)
8. Etisus Detnatus (Herbst)
9. Carpilus Convexus (Forskall)

貝がら —

貝がらも豊富である。カバンを肩に半日も海濱をさまよると、40種ほどの貝がらがひろえる。主なものは

1. ヒメジャコ (シラナミ)
2. ホラガイ
3. チョウセンサザエ
4. ウミギク類のもの若干
5. タカラ貝に属するもの數種
6. シロ及びムラサキイガレイシ
7. ウネボラ
8. ムロガイ
9. ムラサキアンボイナ
10. ホソスジウズラタマキ
11. イモガイ類のもの數種
12. タケノコガイ
13. オニコブシ
14. 二枚貝類 (ツキガイほか數種)
15. ネジアサリ (?)

16. エボシガイ (?)
17. タモトガイ類らしいもの若干
18. ヒアウギに似たもの2~3種

鳥 類 —

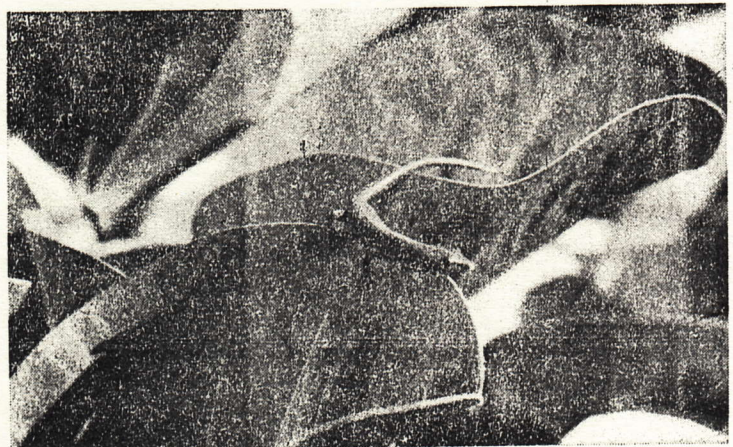
「南鳥島」の名にたがわず鳥類は實に多い。しかし、渡りの時季があつて、年中いるわけではない。たゞ、イソギ (?) だけは越年して姿を消さない。この鳥は、チドリに似た感じで、やや太っており、橄欖色をしている。11~12月ごろはこの鳥の獨舞で、ときどきカモやシロサギ (チコウサギ?) が數羽見えることがあり、グンカンドリやアホドリが單獨でまぎれてくることもある。

3月中旬になると、無数の鳥が群來して、晝間はいうまでもなく、夜もその啼き聲がうるさい。しかし朝の散歩に砂濱や屋根に落してある卵を拾うのは楽しみである。

しわがれ障で、カラスのように黒いので椰子ガラスと呼ばれているのはヒメクロアジサシであるが、このほか、シロアジサシ、オオアジサシ、コアジサシ、マミジロアジサシ、エリグロアジサシなどカモメ科の鳥が多く、ウミツバメ科のオーストンウミツバメ (鳥島では胡鳥と呼ぶ)、コシジロウミツバメなども飛翔しているのを見かける。

アカオネットタイチョウらしいのが2羽ほど灌木にいるのを見かけたという人があり、時にはオナガミズナギドリやセグロミズナギドリが岩礁上にうずくまっていることもある。

鳥の渡りは4月から6月にかけてが最盛期で、8月になると、たいぶ



マーカス島のグンバイヒルガオとトカゲ

少くなり、9月10月といつのまにかもとの静かな島にかえり、イソシギだけがクロズアップされてくる。

衛生

数年来無人のままに放置されていたためか、危険な細菌はいないらしい。気温、湿度が高く、暑いので半裸で作業することが多いから外傷を受けやすい。しかし化膿することがほとんどなく、すぐなおる。路面が堅く、ヤスリのようにになっている所が多いので擦過傷をうける頻度が最も多い。たゞランプ虫による水泡や生きたサンゴ樹による擦過傷は、体質によって多少異なるが、一般には皮膚炎に発展して治りにくいから、直後に消毒する必要がある。

強烈な光線のためか、又は颯風のためかわからないが、鼻粘膜や咽喉粘膜を胃されてカタルを起し、カゼと全く同じ症状でセキになやまされたり、やたらに水泡が出てこまることがある。新来者に多く、時にはその半数以上も同時にやられる。体質にもよるであろうが、慣れると少くなるようである。

倦怠症を訴えるものが多く、常に1~2割の人数はあるが、ビタミン剤の適用によって容易に元氣をとりもどす。

海岸の光線は殊に強く、普通の肉眼では堪えきれないので、一般にサングラスが用いられているが、人によってはそれでもひどい結膜炎にかゝることがある。

飲料水は雨水に依存していて、これを貯水しておかねばならない。長く旱天がつかいたり、特に需要が多いときは海水を蒸溜して用いる。石炭を燃料とする原始的な方法でも日産10石は容易である。蒸溜水は全く無味で、食鹽や砂糖を加えても何となく不快なものである。やむをえず1ヶ月近く蒸溜水のみによる生活をつづけたことがあるが、索漠とした焦燥感にとらわれるのを如何ともなし得なかつた。しかし目立った障害は起らなかった。

島には約10メートルの深さの井戸が一つあり、水量は無限に近いが、かなり鹽氣があり、植物性の色素がとけているらしく淡紫色である。試

験の結果は、硫酸鹽が多量に含まれていて、飲料には不適と判定された。やゝ硬く石鹼が溶けにくい。浴用や洗濯用には充分利用され、このために比較的爽快な生活を送れる。

氣象

年間の總雨量は大体1000ミリ内外と思われるが、これに達しない年も多いようである。降雨日数は各月とも15日以上あり、25日を数える月も少ないが、降り方が少く、地面をうるおすに至らない程度のもが多い。一日中降ることは稀で、たちまち晴れてかんかん照りつけるから水は不足である。

3~5月は乾期にあたり、1ヶ月の總雨量が30ミリにも達しないことが多い。8~10月は雨期に相當し、150ミリ内外の月雨量がある。この頃は降雨日数も1ヶ月に24~25日位あり、落ちつかぬ空模様がつづく。

12月と2月もそれぞれ100ミリ内外の雨量があるが、12月は降雨日数15日位で、まとまって降ることが多く、2月は降雨日数24日にもなりジメジメした日が多い。

これを氣壓配置の上から見ると、乾期は溫帶高氣壓帯内におかれる時期であり、雨期は赤道前線帯に入る時期である。又12月は大陸高氣壓の發展に際しての前面の割れ目に當る時であり、2月は北太平洋高氣壓の發展に際して前面の割れ目に當る時であることを思い合せると、自ら各月の氣象特性を理解できよう。

7、8、9と月が進むにつれて、台風は次第に島に接近して南方を西進するのを常道とするが、10月になるとともに島に向って北進し、あるいは島の附近で急に發達するような傾向となる。

10月はこの島の荒れ月で毎年1回位は經驗されるらしく、数年毎にきわめて猛烈なものが襲来するものと思われる。昭和26年10月23日に本島を襲ったサラ台風は瞬間風速51m/sという記録を残した。

気温は2月ごろ最も低く、7月ごろ最も高いが、最低15°Cを割ることはなく、最高35°Cをこえることはない。年中盛夏期の服装で通せるが、1~2月ごろの雨の日にはやゝ寒さ

をおぼえ、夜は毛布を重ねることがある。しかしこの頃でも日向は裸でも我慢できる程度である。

風がわりあい強く、5~10m/sの頻度が最も多く、1日中無風に終ることはない。したがって気温の高いわりに日蔭は涼しくてしぎよい。

湿度は50%以上というのが普通であるが、1~2月ごろ30%を割ることも稀にはある。

砂面温度は7~9月頃の日中50°Cをこえることが数回あり、2月頃の曠方には15°Cを割る。

溫帶高氣壓帯の南側に位する關係上、各月とも東寄りの風が壓倒的に多い。(1952年6月20日記)

本稿を草するにあたっては國立科學博物館の朝比奈貞一博士の御配慮により下記の方々の専門的な御教示をいただいたことを深く感謝いたします。いずれも筆者の拙いスケッチによって検定あるいは同定を願ったので不確実な點が多かったのですが不明の點や誤認は次の機會に確認、訂正してゆきたいと思っています。

植物…科學博物館 奥山春季氏
動物…山階鳥類研究所 高島春雄氏
昆虫…科學博物館 黒澤良彦氏
エビ…水産大學 久保伊津男氏
カニ…横濱大學 酒井 恒氏
貝殻…科學博物館 瀧 信氏
魚類…東海水産研究所 阿部宗明氏
(中央氣象台瀧島課長)

本稿を掲載するにあたり、生物學的な詳しい記述の部分を割愛したことをこゝにお断りします。(編者)

新刊 三宅 泰雄著 紹介 海のなぞ

海には金やラジウムがあるというがそれはどのようにして存在するのか、「潮目」ではどういふことが起つているか、「底ゆうれい」というのはどんな現象か、「鳴く魚」がいるというのはほんとうか等、私たちは日ごろ海に關する色々の疑問にぶつかると、本書は、海洋化學の研究者たる三宅博士が、これらの海のナゾを中心とした47項目にわたる題材を選び、科學的に興味深く解説したもので、誰が讀んでも成程と得る所の多い、海の知識の本である。くわしい索引もついている。

(A 5 判220ページ200圓牧書店)